

これからのペルー観光スポット チャチャポヤス

桜井 敏浩

現在、ペルーの観光地といえば何といっても南部アンデス山中にある天空の都市遺跡マチュピチュであり、中部の砂漠地帯に描かれたナスカの地上絵が挙げられる。それらにこれも世界遺産のリマ旧市街歴史地区と、北部古代アンデス文明の土器等を中心にしたラルコ・エレイラ博物館、黄金細工と中世から近代の武器のコレクションが見応えある黄金博物館、日本人実業家の天野芳太郎氏がリマ北方のチャンカイ谷の墓群から織物や土器を収集した天野博物館などを見てまわり、さらに時間と費用の余裕ある人はボリビアとの国境にあるティティカカ湖まで足を伸ばすというのが、日本人のペルー観光の定番になっているといえるだろう。

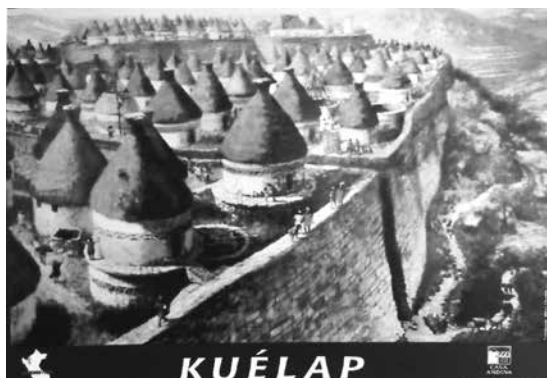
ペルーにはこれらのほか、紀元前 1100 年頃からのチムー文明の都市チャンチャンやアンデス古代文

明の源といわれていたチャビン・デ・ワントル、紀元前 2900 年に遡るとの説があるカラル遺跡や、インカ帝国の首都クスコ市街、南部の都市アレキパの歴史中心部、さらにはペルー最高峰 6,768m のワスカランやアンデス山麓からアマゾン河上流にかけてのマヌー、湿潤森林のリオ・アビセオといった国立公園なども世界遺産に登録されているが、これからマチュピチュ、ナスカに続く観光の目玉になろうとしているのが、北部のアンデス山脈東麓にあるチャチャポヤス¹で、現在、世界遺産登録手続きが始められている。また、ペルーでも貧困率の高い北部 4 州の一つである所在地のアマゾナス州の貧困・所得格差問題に対応するための総合的な地域開発の一環として、チャチャポヤス周辺のウトウクバンバ溪谷の観光振興のための施設整備、行政能力強化のための技術協

力や道路・廃棄物処分場建設のための円借款 29 億 500 万円の供与が決まっている。

また、チャチャポヤスにある中心的遺跡クエラップ神殿遺跡については、国際協力機構 (JICA) も協力して、日本の考古学研究者も参画した地域住民も巻き込み遺産管理のマネージメント手法の協力も進行中である²。

筆者は 2014 年アンデス文明研究会 (<http://www.h6.dion.ne.jp/~andes/>) の創立 20 周年記念企画として行われたペルー北部遺跡めぐりの旅に参加し、9 月 6 日に行われた日本調査チームが発掘したクントウル・ワシ遺跡調査 20 周年式典への参列、同じく国立民族学博物館の関 雄二教授等が発掘しているパコパンパ遺跡、カラル遺跡や各地の博物館を見てまわる一環として、チャチャポヤス



クエラップ要塞・神殿都市の復元図 (チャチャポヤスの町から 39km のホテル Casa Andina Classic で飾られていたもの)



クエラップの城壁



3つしかない入り口の一つ



構造物外壁面の菱形模様

のクエラップ遺跡を見てきた。³

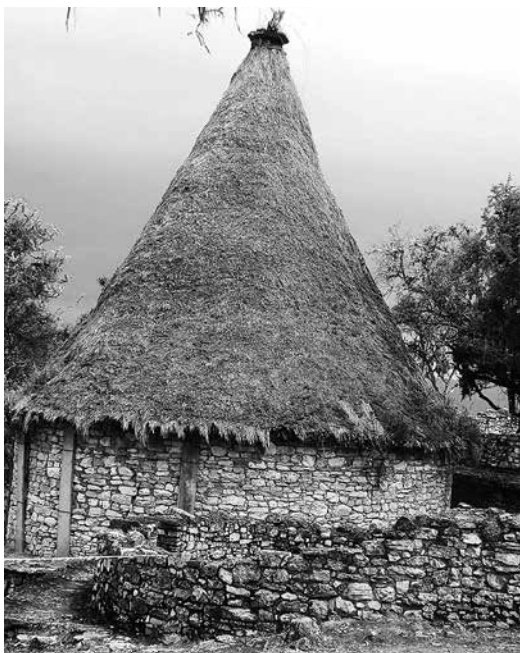
ペルー北部の都市チクラヨを10日朝7時半に専用バスで発ち、1時間たらずで完成後まだそう日が経過していない北部大洋間道路(Carretera Interoceánica Norte—北部港湾 Paita から東に Rioja、Tarapoto を経由してアマゾン河上流地帯の Yurimaguas まで 955km の立派な全舗装の有料道路)に入った。アンデス分水嶺を超えたところにはブラジルの建設会社オデブレヒトの手になるロックフィルタイプの貯水池ダムが完成しており、水の少ない太平洋側に導水トンネルを掘って発電と灌漑に使うという。さらに高度を下げ熱帯雨林の河岸平地では水田で稲作もしており、JICA が技術指導した日本式の田植えが見られた。午後5時に大洋間道路を降りてさらに1時間走り6時にやっとチャチャボヤス近郊にある素晴らしいリゾートホテルに到着。コロニアル風の木造2階建ての、清潔で広い部屋と質の高いイタリア料理風の食事が供される、欧米人が泊まっても満足す

るレベルで、もとより各室で使えるインターネット無線 LAN も整備されている。

翌朝7時半にホテルを出てかつてのチャチャボヤスの首都クエラップ要塞へ向かった。1時間余ほどで谷の反対側の山上に遺跡を望めるところまで来たが、谷を渡るためには川沿いにさらに進み、谷のどん詰まりまで行き小川になった所で対岸に渡って山を登るので、クエラップ遺跡の登り口に着いたのは途中休憩もあり11時半近かった。要塞は海拔3000mの山頂にあり、坂道を30分ほど徒歩や馬で登らねばならない。遺跡は周囲を見事な石積みの城壁と断崖で守られた南北584m、東西110mの楕円状基壇の上に高低差を利用して用途別に二層に分かれ、最も高い所には見張り台、神殿や上層階級とその従者の居住区、儀礼・行政・工房・住居用の円形構造物群などがあるが、入り口は3箇所の次第に狭くなる切り込み状の階段で最後は人一人が通れる幅しかない。

円形土台を残す住居跡には円錐形の草屋根が復元されており、インカに屈してその統治を受けるまで3,000～4,000人が居住していたと推測されている。

スペインのクロニスタ(記録者)によれば、紀元後800年頃北からアマゾンの種族とは異なる色の白い種族が来て、生活様式、工芸品、埋葬方法等を持ち込み、ここを首都として栄えたが、1470年頃に徹底抗戦もむなしくインカ帝国に征服され、その後インカの太陽信仰に基づく方位石の設置や建造物の手法が強いられたといわれる。インカに恨みをもつ彼らはスペイン人が侵入してきた際には手を貸したものの、その後スペイン人に滅ぼされるのだが、まだその文化の解明は始まったばかりで、上水・排水システムや建築技術など分らないことが多い。いずれにせよ、その全体の規模やよじ登れないような表面がなめらかな石積みの高さ20mもの壁と見張り台で外敵の侵入を阻止しようとした要塞の面影、儀礼が行われてきた神殿、上下様々



復元された円錐状の構造物



山頂南端にある Templo Mayor (主神殿)
(いずれも筆者撮影)

な身分・職種の人たちが多数住んだ居住跡など、先インカ期に栄えた壮大な遺跡は、一見に値する魅力をもっている。

チャチャポヤスへは、リマからなら長距離バスで約 22 時間、最寄りの空港のあるトルヒーヨあるいはカハマルカ、チクラヨ、タラボトといった町からでもバス等で 10～13 時間もかかる。すでにチャチャポヤスから 3km ほどのところに空港が出来ているのだが、数年前に事故を起こし、未だ管制設備が不十分であることから定期便は就航しておらず、現時点ではきわめて不便な立地であることは否めない。さらに、北のマチュピチュともいわれるクエラップ遺跡のほか、断崖の窪みにはめ込まれたような庶民の墓といわれる家状の建造物が連なるレバッシュの霊廟、近郊のコンドル湖畔から発掘された 200 余体のミイラや包んだ織物等の出土品が素晴らしいレイメバンバ博物館、標高 2,770m の断崖途中に立つ 6 体の人型のカラ

ヒアの棺、自然景観としては上段約 231m、下段 540m の二段からなる高落差のゴクタの滝など、周辺には魅力ある観光地に事欠かないのだが、チャチャポヤスを起点にそれぞれを見て町に戻るまで、どれもほぼ一日がかりなのが難である。日本人が世界で一番行ってみよう世界遺産であるマチュピチュでさえ 1～2 泊しか割かない“弾丸ツアー”と揶揄される日本の団体旅行では、一箇所に 3～4 泊しなければならない日程を組むことは難しいだろうが、欧米人はゆったりと滞在して毎日あちこちを見に行っており、すでにチャチャポヤス市内と近郊には十分彼らの要求に応えるレベルのホテルが存在している。遠からずリマから 20 人乗り程度の小型機の定期運航が始まるとの話もあり、チャチャポヤスまでの往復時間は大幅に短縮されるので、これからのペルー観光地として日本でも脚光を浴びてくることは確かである。(既に『地球の歩き方 2014～15』のペルー等編でも 4 ページを割いて見所等

を紹介している。⁴⁾

(さくurai としひろ 徳倉建設(株)特別
顧問、ラテンアメリカ協会常務理事)

- 1 『岩波 アメリカ大陸古代文明事典』 関雄二編 岩波書店 2005 年 201～202 頁
- 2 「クエラップ遺跡と「雲上の民」チャチャポヤス ～文化的景観による世界遺産登録とマネジメントの国際協力」 八百板季穂 (北海道大学観光学高等研究センター特任准教授) 『チャスキ』 第 49 号 アンデス文明研究会編・アム・プロモーション発行 2014 年 6 月
- 3 「チャチャポヤス訪問記」 森 和重ほか 『チャスキ』 第 50 号 2014 年 12 月
- 4 「Chachapoyas」 『地球の歩き方 2014～15 B23』 ダイヤモンド・ビッグ社刊 2014 年 199～202 頁
関連サイト: 「北のマチュピチュ、「クエラップ要塞」」ほかチャチャポヤス周辺の見所の紀行・解説が載っている。
原田慶子 2013 年 3 月 8 日～2014 年 8 月 10 日
http://www.ab-road.net/south_america/peru/lima/guide/06040.html